

質疑

パネリスト：山下正寿、猪瀬浩平、田中正晴、森 明香
司会：岡田健一郎

○司会（岡田健一郎） では、会場から寄せられた質問用紙にまず回答していただきます。猪瀬さんに対して、2件質問が来ていますので、順番に読み上げていただいて、回答をお願いします。

○猪瀬浩平 ご質問いただきましてありがとうございます。

1つは、整備協のその後はどうなったのでしょうか。残念ながら解散してしまったようですが、整備協がつくり上げた農民主導の村づくり意識といったものは、今はもう残っていないのでしょうか。ご存じのことがあれば、ご教示くださいということ。

このことについてお答えする前に僕の話の趣旨としては、隼川原発が必要だというふうには言いはじめたのは、中央側の視点ですよね。これ、先ほど説明からは省きましたけれども、大平内閣時代の第三期全国総合開発計画、いわゆる三全総というのがある、その中で高知県の西南地域が愛媛県南部と並んで課題地域として名指されるといふ。その課題地域として名指されたときに解決プランとして、エネルギー備蓄中継基地構想と原子力発電所等が出されるんです。

具体的に動き出した計画は、宿毛の石油備蓄基地構想で、これは、ご存じの方が多いと思いますけども、漁民たちの反対運動によって完全に止めたというのがあります。で、もう一つ大きかったのが、この隼川原発の話です。

そのときに、つまり住民たちが考えて原発が必要だと言っていた話じゃなくて、気づいたら課題地区にされていて、そして、その解決プランとして原発があるよって言われてしまうことで、その後も「原発を受け入れたらどうなっていったらだろう」という仮定の話のせざるを得なくなるんです。受け入れようが受け入れまいが、「原発を受け入れていたらもっと豊かになっていたかもしれない」ということに対して、常に説明を迫られる状態があるという。これは非常に不毛ですよ。自分たちで内在的に出す問いではないわけです。勝手に「原発つくるぞ、課題地区だから」と言われてて、でも、その問いをされた瞬間に、もう原発が来る可能性が既にできてしまっているわけだから、その

ことを常に問わざるを得なくなってくる。

これが悲しい形で、2011年3月11日以降の原発危機の中で、その声は小さくなりましたが、実際スナックとかでおんちゃんたちと飲んでいると、「原発来てたらもっと今、寂れてるけど豊かになってたき」みたいな話で盛り上がる時なんかもあったりするときに、それはだから常に問われてしまうことというのがやっぱり窪川においてのすごく、常に指摘しなきゃいけない問題であるというふうに思います。

そのうえで、この問いに対してどうお答えするかといったときに、これもどう答えるのか、難しい答えであるんですけども。例えば、窪川で高知県の一番成功したと言われている「クラインガルテン四万十」というのがありますけども、それがどうしてできたかと言うと、地元の若手農業後継者たちが「トピア21」というグループで欧州のほうに視察に行って、それでスイスとかでクラインガルテンの活動を見たりする中で、これ、窪川にあったらいいんじゃないかという話の中で、それを上に上げていって実現していったという形になっています。

そういう意味でいうと、「クラインガルテン、必要だからつくみましょうよ」といった話じゃなくて、若い農業後継者たちが実際ヨーロッパを見てきて、こういうものが自分たちの土地に合ってるんじゃないか。四万十川流域で、豊かな自然があるって中で、こういうものをつくれればいいんじゃないかという話の中でできてきてるんじゃないかなんていうことは、一つ、内在的な農民主導の村づくりの意識がある中でできてきた動きじゃないかなんていうことの一例として言えるんじゃないかなと思います。

ただ、今、森さんから頂いた問いの中で、あとで「もう一言」というところで言おうと思いますけど、そのクラインガルテンの横に、高知新聞でも非常によく取り上げていますけども、次世代施設型園芸の植物工場20ヘクタールのものが隣りに出来てしまっているという、非常にちぐはぐな状況があって。これがだから農民主導だったのかと言われると、よくわからないところがある。かつ、そのことに対しての農民の意識というのは、多分いろいろある中で、でも何かメディアを含めて、いい面がかなりクローズアップされて語られているなというふうな印象も持つ部分もあります。これはもうちょっとあとで補足できればというふうに思います。

それからもう一方、ご質問をいただきましてありがとうございます。「窪川の原発は女が止めた」とよく聞かされます。いかがでしょうか、ということ。

これも重要な指摘だと思うし、実際、語るとどうしても男の運動、男中心の語り方になってしまう中で、例えば、実際、窪川の中でも女性農業者がかなり結束して活動を展開していくとか、持続的な活動を展開していくということはあったし。その中で、

実際、その当時から語られているし、今でも語り継がれていることで、例えば、男女の食事を、もうお母さんも動かなきゃいけないという中で、旦那も手伝うようになったみたいな語りは語られてたりする中で、女性の活動によって、その中の構造にも変化も起きてきたんだろうなというふうに思うんですけど。

ただ、「女が止めた」という語りも、だから、男しか語られてない中で女が止めたっていう語りを強調することは重要だと思うんですけど、この語りだけ言っちゃうとちょっと違和感があるなという形で、「男も止めたし、女も止めた」というところがポイントで。

ただ、もう一つ、「女が止めた」ってあえて言わなきゃいけない意味というのは、酪農婦人に僕よく話を聞くわけですけど、やっぱり酪農というのはすごく大変で、朝昼晩あって、外にも出れないという中で、実際家事もやらなきゃいけないし、多頭化しなきゃいけない。牛の数を増やさなきゃいけない。労働強化もしていくという、非常に大変な中で、それでも原発反対運動をやっていたということの意味というのは、やっぱりすごく強い意味があるだろうなというふうに思います。女性の視点で窪川原発騒動を見ることは当然大事だと思いますし、そういう視点の中で関わる主体によってどういう関わっていることの意味というのが見ていくのかというのを丁寧に聞き出していくとか、そのへんを記録していくということは大事だなというふうに思っています。

それは、多分、浦戸湾の話にしても、それからビキニ被爆の問題にしても、今の話の中に出てきた、例えば食卓に放射能が汚染されたマグロが来るというところで主婦が立ち上がった話だったりとか、浦戸湾の話にしたってそのへんは多分実は語られていた事柄の中に見えてくるんじゃないかなというふうに思います。以上です。

○司会 ありがとうございます。

質問には全部答えていただいたので、さっきのお三人のご報告で言い足りなかったことなどを順番に補足でコメントをお願いしていきたいと思います。

山下さん、お願いします。

○山下正寿 なんて日本の漁民が被害者なのに隠したのかということがどうしてもわからなかったのです。これほど秘密にする必要はないと考えていたのです。

現代史、政治的背景とかをずっと解明していくと、最近、少し見えてきたのが、一つは、当時、アメリカの占領下に置かれて、広島、長崎の原爆の被害者の人たちの医学的分析をしていたのです。ABC C (Atomic Bomb Casualty Commission: 原爆傷害調査委員会) から「放影研」、そのうち「予研」(厚生省国立予防衛生研究所) ができ、その

直後にビキニ事件が起こった。

広島、長崎の被爆者の分析をしている、だんだん日本に研究の比重が移っていく途中に、このビキニの事件が起こった。予研にいたメンバーを、急に起こったので拡大してビキニの対策協議会を設置した。主に医学的な分野で、ビキニの放射能の影響、同じ放射能の影響ですから、ビキニの場合はどういう影響を受けるかということ、第五福竜丸の乗組員の分析だけでなく、日本の漁民の被害の分析も担当すべき研究機関ができたのです、対策協議会の責任者が小林六造という人で、七三一部隊の関係者でした。七三一に大量に若い医師を送り出した責任者でした。

本来ならば戦犯で長期に刑を受ける立場にあります。アメリカGHQにその判断が握られている。アメリカは核開発を進めようとすると同時に、細菌兵器の研究に強い関心を持っていた。だから七三一部隊の資料は、アメリカが独占したいために、彼らに刑を科さずに資料を渡せということで、特別に裁判にかけなかったわけです。

それでビキニ核実験の資料を渡すだけじゃなくて、ビキニに関する対策についても協力させられたということです。小林六造という責任者が駐日大使のアリソンという人と意見交換したものを、アリソンがアメリカに報告していた文書が見つかった。そうすると、こう書いてある。

第五福竜丸の（船員の）尿を持ってこいと言っているのに、たった二人分しか持ってきてない。これでは研究はできないと言っています。要するに、アメリカがせっかく分析しようとしているのに、ちゃんとした対応をしてないじゃないかということで圧力をかけてる状況の文書が出てきました。関係としては、対等でない関係です。

それから「メモリアルコード」という、特別にアメリカ大使館を通じて、アメリカ国務省に被害の状態の記録が渡っている。その中には、船員の放射能汚染記録も入っている。だから日本の当時の厚生省は、船員の汚染記録は隠して出さなかった。ところがアメリカに対しては、全部渡しているのです。そういう役割を小林六造はさせられていたということがわかってきて。「予研」には、小林六造だけじゃなくて、七三一関係の関係者が6人ぐらいいます。レントゲン担当した人は、実際に捕虜の子どもにレントゲンをあてて、人体実験をした人です。そういうメンバーが、実はこの一番大事な対策をさせられていたということがわかってきた。

もう一つは、高知出身の吉田茂がこの事件の担当内閣だった、最初。吉田内閣はアメリカの主張を鵜呑みにはしないで、政府の調査船を独自に出した。マーシャル諸島海域の海水調査をして汚染を立証した。プランクトンから食物連鎖が起こって、特にカツオの内臓が一番高かった。調べてデータを出してアメリカに突き付け損害補償に生かし

た。当時の政界の状況は、吉田は再軍備に消極的だということで、な内閣打倒動きが内外で起こった。そして、鳩山一郎が首相になって、重光が外相になって、与党の日本民主党の幹事長に岸信介がなった。3人とも戦犯です。

戦犯中心の内閣が出来上がった途端に、日米科学者会議を開いて、アメリカの科学者の言い分を一方的に主張させ、全部非公開とし新聞記者を入れず、結果だけを伝えた。500カウントは大丈夫だからマグロは安心だと。それから、マグロの放射能も亜鉛だから大丈夫だということをアメリカが主張し、日本の科学者は反対する。亜鉛といっても亜鉛65で、通常の海水の1万倍以上の放射性物質が入っていると主張します。政府は、その主張を抑えて、大丈夫だからマグロの検査を中止しますということで、12月末に中止したのです。この前の日に、重光とアリソンが会談を行い、その翌日に中止したのです。

そして翌年1月に入ってから政治決着です。この事件は、アメリカの責任は問わない。そして、200万ドルの賠償金で決着して、あとは一切責任がないという、政府間の判断で決着した。この段階で漁民の被災は消されたわけです。

こういう特殊な政治背景があったのです。普通、政治決着というのはあまりないですから。政治決着したことによって、被害者を切り捨てていくというやり方をされたということがわかってきました。

実は今、福島で似たようなことが起きている、情報をまず隠してほとんど出さない。一番大事な被災の初期症状が大事なのですが、これを隠しています。そういう状態のままでも最初、「放射能で死んだ人はいない。原発事故で死んだ人はいない」としきりに言っていました。そういう中で、因果関係の立証が難しい。見えないし、分析もしにくい、だから、福島の放射能被害を消そうとする。これから起こってくる裁判で因果関係立証不可能という線に持ち込もうとする流れを感じます。

このビキニ事件の解明のカギは、漁民が長期にわたって影響を受ける内部被爆の立証です。内部被爆の分析は残念ながら日本は非常に弱い。ほとんど広島、長崎の外部被爆が主な分析です。しかし、体の中に取り込んだことがどんなに恐ろしいかということです。食べたり、それから海水を口に入れたり、放射能の雨水を飲んだ影響をきちっと見ていかないといけない。

核保有国は、内部被爆を出されると核実験も絶対できなくなる。長期にわたって人類に影響を与えるということがはっきりわかりますから、だからこれは必死になって隠そうとします。ここを明らかにしないと福島の救済ができない、子どもの問題も含めて。科学者はこの内部被爆を解明する責任が今出てきている。ビキニの被害者の状況を通じ

て、内部被爆の深刻さというのを伝えていく、今、一番大事なときじゃないかなという気持ちです。

○田中正晴 すみません。パワーポイントを出していただけませんか。さきほどの話に補足させていただきます。

法律の問題ですけども、私、素人であんまり偉そうなことは言えないのですが、1950年から53年にかけて水質保全部、工場排水規制法が制定されそうになりました。しかし、それは通産省と産業界の反対で国会に上程されませんでした。しかし1958年に東京の本州製紙江戸川工場に漁民が乱入して、60人余りが負傷したという事件がありました。この事件は高知パルプと同じように、本州製紙が廃液を江戸川に流し、下流の浦安のあたりに流れ出て、浦安近辺の漁民が汚染元の工場に乱入したというものです。

事件後、上記の水質規制二法が国会に急に上程されて成立いたします。しかし、規制の基準は政令で決めるので、その政令を決める審議会は企業側に著しく負担をかけないという方針のもと、業界代表、企業側の代表を審議会に入れるなどして、企業側に不利な基準はできなかつたと宇井純氏が生コン裁判で語っております。いわゆるザル法だったわけです。

その後も1962年大気汚染に関してばい煙規制法が成立しますが、審議会は企業の代表で占められ、これも公害公認のための法律に成り下がっております。

1967年には公害対策基本法が制定されますが、この法律も世論対策であり実効性は全くもたなかったわけです。この状況下で田尻宗昭氏が奮闘されます。田尻氏は三重県四日市海上保安部警備救難課長時代に、漁民の違法操業を取り締まっていましたが、取り締まり中に、「一人の老漁夫から、工場は排水の垂れ流しで何十万匹という魚を殺している。わしらを捕まえるのであれば、向こうから先にやれ、あんた方は海上保安官でなく工場のガードマンだ」と漁民に言われたそうです。それがきっかけとなって工場排水を取り締まる法律を探しましたが、上記の水質保全部・工場排水規制法では取り締まれません。それで水産資源保護法、三重県漁業調整規則、船を守る港則法、港湾施設を守る港湾法などを駆使しまして、三菱や石原産業の垂れ流しを取り締まりました。

生コン事件の裁判で被告側証人として出廷された田尻氏は、その経験から「住民運動の積み重ねが大事で、それが法整備を推し進め、厳しい法令の適応が出来るのではないか。」と陳述されました。

田尻氏が伊勢湾での取り締まりを続けている頃には、全国各地で公害問題が頻発しているわけです。全国で住民たちが立ち上がり反公害運動を始めております。1970年、東

京都やほかの地方都市が国の基準より激しい条例をつくります。こんなことあり得ないのです。国の基準より激しいものというのはできないですけど、もう公害現場の行政が持ちこたえることができなくなったのだと思います。それに世論が後押しします。

1970年11月の臨時国会は公害国会と言われました。この国会で水質汚濁防止法が成立します。これにより1971年6月に国の工場排水の排水基準が160ppmに公布されます。さきほど言いましたが、高知パルプは排水基準が600ppmになると踏んでいました。製紙業界が排水基準に対して国会議員等を使いまして、かなりロビー活動をやって600ppmに決まりそうになったからです。しかし、結局世論が後押ししたというか、あまり公害がひどいもので、160ppmに決定されました。現在でもこの基準が使われております。そして1972年10月1日より排出者に無過失責任が科せられます。このような経過の中で、高知パルプは操業をやめざるを得なかったというのが真実のようです。

とにかく法律は多分私が思うに使い方です。どっちでも転ぶのですよね。それをいかにうまく住民の側になるように使っていくかということだろうと私は思っております。以上です。

○司会 ありがとうございます。

あと、猪瀬さんからのリクエストで高知大学人文社会科学部の教員の後藤先生が今日、いらっしゃっていて、高知県の農業のこととかも研究されていて、ちょっと今回のこれに対してコメントがもしあればということなのでコメントのほうをよろしく願います。

○後藤拓也 ただ今ご紹介に与りました高知大学の後藤と申します。ちょっと私、シンポ運営委員をやっておりまして、まさかコメントを求められるとは思っていなかったんです。

ただ、猪瀬先生は去年私が書いた論文を読んでくださって、ぜひコメントをということだったのでちょっと長くなるかもしれませんがしゃべらせていただきます。

今日の猪瀬先生のお話で重要だったのが、窪川にとって自立的な農村空間をつくっていくということが大事で、それがもう80年代の最初から意識されていたということが非常に興味深かったんですけども。最近、窪川の農業というのはかなり変わってまして、先ほど、猪瀬先生がおっしゃった次世代型ハウスという大規模な植物工場ができてまして、それが窪川の農業を大きく変えようとしている。

今日のレジメの猪瀬先生が作られた図の2という地図をご覧くださいなんですが、

先ほどご説明があったとおり、原発の立地予定地というのが大津留と冠岬というところで、ハウスが建っているのがそのすぐ隣の本堂という場所になります。

植物工場というのは、非常に人手が必要でして、大体1ヘクタール当たり25人ぐらい従業員が必要であるというふうに言われているから、地域にとっては植物工場が来ることで雇用が生まれるんです。地元の方が採用されて、非常に地域経済にとってはプラスになるという側面もあるんだけど、少し問題だと思われる側面もあります。ここで、私がフィールドワークをやった幡多郡の三原村の話をさせていただきます。

なぜ三原村かと言いますと、私の研究テーマが農業地理学という分野をやっているから、企業の農業参入について今テーマを取り上げてやっています。三原村というのは、カゴメという会社がトマトの大農場を今つくってやっています、非常に地域おこしに成功しているというふうに言われてるところなんです。

私が調査を3年間ぐらいしたところで感じた印象なんですけど、確かに雇用は生まれて地域にとってはかなりプラスな側面はあるんだけど、必ずしもそれが地域の農業とか農村の自立的発展には結びついてないんじゃないかというふうにちょっと判断しています。

なぜかと言いますと、雇用が生まれるというのはもちろんいいことで、働いている方に話を聞いても非常に生きがいを感じて、土いじりが好きだとか、植物をいじるのが好きで本当楽しく仕事もできて助かっているという人が多いんですね。ただ、その内容を見ますと、作業自体がかなりマニュアル化されていて、親会社のカゴメが作業をマニュアル化している。農業をまったくやったことがない方でもちょっとトレーニングすればできるんです。逆に何か初心者の方が都合がいいというぐらいマニュアル化されています。これは、先ほどの森先生のコメントにあった中でまさにそのマニュアル化された道具利用ということで、IT農業のお話を出されていたと思うんですけども、まさに植物工場というのは作業がマニュアル化されているので、これが地域とか農村にとってどういう意味を持つかという、農業技術がまわりに広がっていかないんです。

例えば、植物工場というのは養液栽培という最先端の技術でトマトを作っているんですけど、例えば自分で養液栽培を取り入れて自分の経営に活かそうという農家が今、三原村でどれぐらいいるかと言いますと、まわりにはほとんどいない。もともと三原村がなぜカゴメを誘致したかと言いますと、もちろん雇用をつくりたいということはあったんですけど、むしろ大規模な植物工場ができることで施設園芸の産地化を図りたいという狙いがある。で、ひいては自立的農家を育成したいということが狙いにあったんですけど、12年ぐらい経った今を見ても必ずしもそれは実現されてないというのが私の印象です。

結局、今日の猪瀬先生のお話に戻しますと、窪川町に一昨年(2016年)の7月にできた次世代型ハウスのカゴメの第2号の農場なんですけども、ここは90人ぐらい雇用が生まれていて、非常に地域にとってはプラスになっています。

ところがつくるときに、これはどこからお金が出ているかというのと、国から15億円ほど補助金が出ていまして、全体の3分の2ぐらいは国とか自治体が出してる。地域を振興しようとするときに、最初に外部の力に頼るということはやっぱりある程度致し方ないことだと思っていて。でも、肝心なのは、それがじゃあ、地域に根付いていくか。長期的に見て、自立的なものにしていけるかということなんですけども、それがこれからどうなっていくかというのは、私はこれからまた研究を続けることで見極めていきたいというふうに考えています。

ちょっと今日の環境紛争という趣旨からは逸れる話になってしまったんですが、農業地理学者としての私のコメントは以上です。

○猪瀬 後藤先生、どうもありがとうございます。ちょうど僕が世話になっているのが本堂の人なので、クライנגルテンによく行くとなぜか巨大なのができて。なんか、働いている人が最初オランダ人ばかりで。建築しているのがオランダの技術なんで。だから、かなりダイナミックに、輸出まで含めて意識してるという、かなりでかい話とじてなっていて、そのへん僕もすごく関心があるんですけど。

ちょっと今日の議論にひき付けていったときに、先ほど、このビキニの話とか浦戸湾の話をしたときに、被害がどう可視化されるのかというのが、言ったらビキニの被爆者というの、周辺の周辺というか、もう起きている場所も日本からすごく離れていて、漁民で、人数もそんなに少ないという中で、しかも健康被害がすぐわかりやすく出るわけじゃないって問題と。浦戸湾とか、江ノ口川の話というのは、もうもろ高知市内真ん中で起きて、すごい臭いも出て。だから、この話を高知で結構人としてても何かみんな坂本のおんちゃんやったねっていうふうに当時語ったんだよねみたいな話をして。その高知市民自体がすごく当事者として、やっぱりきれいになるということとか、汚れているということやすごい当事者性を持って受け止めているって。この何か、違いがすごく印象に残りました。

今、後藤さんがしてくださっている、次世代施設型園芸ももしかしたらすごくいいのかもしれないし、課題もあるのかもしれないんだけど、何か、今語られていることが僕の発表タイトルで言うと、ヌルヌルした生の声じゃなくて、何か結構ばら色の未来みたいな。クリーンで、攻めの農業の拠点になり、スマートアプリみたいな感じで、すごい

クリアな展望の中で語られている。

でも実際、例えば、先ほど山下先生もおっしゃいましたが、東日本大震災の中と原発事故の中で、すぐやられたことと、なかなか全然やられてないことと2つあって。いわゆる国土強靱化と言われて、防波堤をつくるみたいことはすぐ動けるんですね。例えば、僕の友人が調査している陸前高田とかは、もう古河工業の技術を使って、超巨大防波堤づくりにお金が、陸前高田には空前の予算が付いてやられていて、それが例えば、須崎だったり、いろんなところで防波堤をつくるみたいな話はどんどんきっちゃう。

でも、放射線被爆の問題とか、原発のことというのは一切そっちに関しては、何て言うか、何となくない方向にどんどん持っていくみたいな話があって。そのときにやっぱりちょうど6年前に原発事故が起きたときに、相当の人たちが当事者性を持って考えられる可能性があったんだけど、そこでやっぱりわれわれが議論せずに、お互いの中に矛盾もあるし、対立線もあるという中で議論せずに、なんか忘却しようとしている。

やっぱりしぶとく住民運動を続けていくということは、実は、内部にある矛盾とか、意見の違いみたいなことも含めて議論していくことが大事だし、そのときに、大学の知みたいなものが少しでも意味があるんだとしたら、今、後藤先生がおっしゃったように、例えば、今、すごくいいことだと語られているものの中に実は課題があるのではないかなと思って丁寧に見ていきながら、それを伝えていくということをしていくということが大事なんじゃないかなというふうに思って、今の後藤先生のことと、それとお二人の先輩に対する僕のほうの応答とさせていただきたいと思います。

○進行（岡田） ありがとうございます。

あと時間、10分ぐらいなんですけど、何かご質問とか、ご意見があれば。

○質問者（勝俣誠） どうもすみません。ありがとうございます。座ったままで失礼します。僕、東京から駆けつけた研究者です。猪瀬さんに誘われて、私、もともとアフリカで、結構、農村開発ものにいろいろと開発研究に携わりました。今日の僕の質問、ちょっと抽象度が高いんですけど。

3人の発表を聞いて、僕が一番関心を持ったのは、環境紛争というのは、過去の記憶も含めてとらえどころがない。誰が被害者だということはわかったとしても、今、もうその方がいないとかいろんな問題があって、私はこれをデモクラシーという形でどういう形で結び付けるかというときに、一番、今日関心があったのは、環境紛争を紛争だとして、これはおかしいと言って時間を割かないといけないと思うんですね。これを僕は

市民活動と呼んでるんですけども、市民活動で、これはおかしいから運動を続けようと言った人の経済的な基盤というんですか。

今日、いみじくも田中さんは、3番目の発表で、バブルのはじけた……、バブルの最中でしたっけ。日常生活の多忙から、やっぱりこう、今一つ関心が薄れてしまうと。これが今、僕は、日本のような先進国と言うんですか、捨てるほどモノがある成熟資本主義の最大の問題だと思ってるんです。

つまり、忙しかったら判断する時間もない、感じる時間もない。でも、紛争問題みたいな抽象度が高い場合、自分が直接誰かに毒を盛られたとか、または、自分が作ったものが誰かを傷つけたということの可視性が見えないところで、ちょっとこれはおかしいよというふうに、デモクラシーの、なんと言うんですか、余裕、それがなぜないのかというものが僕は疑問で。

僕は今日、ですから、山下先生に、やはり先生だったからこういう持続的活動ができたのかなという、資料集をずっと……。資料集でしたっけ、を作られてるので、そういう意味でちょっとお答えいただければと思います。運動の持続性に職業的な何かかわゆる特質があるかどうかということです。

○山下 たまたま私は港町育ちで、宿毛の片島というところで子どもから育ったんです。お菓子屋さんをやってて、うちが。マグロ漁民の人が沖ノ島に帰るときに、うちでお菓子を買って帰ってくれてたということがあって、子どものときからマグロ漁民の人とつながりがあったんです。ところがこの事件、私、9歳のときです。そのあとで、その漁民の人の状態がおかしいということ子どもながらに感じたんです。

今覚えているのは、声がまったく出ないような人が急に増えた。それから首のところにコブができる。それからほとんど全員が白内障になった。そういう状態を子どものときに見てて、あれだけ元気で明るくて、まあ、いわば体力のある人しか（漁に）連れて行きませんからね。大体3時間から5時間ぐらいしか寝ないですから、20日間ぐらい操業する。普通の人では絶対にもたないから。頑丈な人だけが行ってるのに、なぜこんな状態になるのかというのを子どもなりに思ってたんですけど、わからなかったです。

でも、船員を調べたら初めてわかった。そのときは、もう本当に腹が立ってきてね、許さんという気持ちが強くありました。何も罪もない、漁民の人というのはすごく明るいし、人がいい人が多いんですよね。そういう人がこういう状態に追い込められてるということがわかったときには、絶対許さんという気持ちと。

それから調べていくうちに、室戸水産高校の高校生がやっぱり急性放射能症で死亡し

てるんです、1年後に。で、久保山愛吉さんと同じ症状が出て亡くなってる。でも、八丈島のカツオの実習をした。これは、高知のお医者さんがマーシャルに行ってたんならわかるけど、なぜこんな遠くにいるのか発症したのかわからない。症状は放射能症とそっくりだと言ってるんですね。

そこは、追跡して調べたら、5月にやったヤンキーという実験があるんですよね。それは梅雨だったんで、ちょうど放射能の雨が日本に降ったんです。その一番集中したのが八丈島だった。どういうわけがここに溜まる。流れてですね。それで集中的に浴びて、ずぶ濡れになってて、そして痔の症状があった。パンツも何もずぶ濡れになってて、それで、操業の終わるときに、この子は相撲部で生徒会長をやった子ですよ。突然、体調崩して、そのまま帰ってくるんですけど、やっぱり症状はものすごくコミヤマさんに似てるんです。

そういう同じ高校生がそういう被害に遭ったということもあって、私たち、顧問ともう絶対許さんと、この事件は、ということで解明するという気持ちが強くそのときはもたらされたということです。

今は、むしろ私はそのこともあるけど、福島のことですごく心配してます。事故があった直後に私は、漁民が心配で。というのは、がれきを集めてるでしょう。がれきに放射能が溜まりますからね、間違いなく。その調査に入って、8回行きました、ずっと。やっぱり今もわかってるのは、この6年たった現在も漁業は再開してないでしょう？ 福島は、完全にね。サンプル捕ってるだけです、今、まだ。あそこは、黒潮が上って、親潮とぶつかって拡散してるところです、一番。あそこでさえ6年経ってもまだ再開できないということ。

これ、伊方原発で起こったらどうなると思いますか。60年は漁業が停止されると思います、おそらく。壊滅しますよ。内海ですから。瀬戸内海は、6時間かかって右に動いて、また6時間かかって、左に動く。海水が入れ替わるのに1年半から2年かかる。こんな内海のところで事故が起こったら大変なことになる。ここだけでしょ、内海に原発を置いてるのは。それはいくらなんでも窪川に置くというのは、まだ外海にあるから事故が起こったときのことを考えてるんですよ。

○猪瀬 まだね、まだ。

○山下 ある意味では。でも、伊方なんていうのは、とんでもないところに原発を設置してる。あそこで事故が起こったら大変なことになる。私、福島調査ですずっと考えた

んです。どんな現象が起こるか、似た現象で。千葉まで放射能が来て、地下水が汚れたんですよ。放射能は飛びますから、高知市なんか真っ直ぐ飛んできます、これ。ここまで確実に飛んできますよ。それで、一番危ないのは四万十川流域です。上流に溜まった放射能がずっと河口に流れてきます。そして、取れません。今も阿武隈川が、河川敷は放射能が溜まって子どもが遊べない状況ですよ。だから四万十川流域のノリなんてとんでもない。アカメも食べれなくなる。

○猪瀬 アカメはどっちにしる食べれないですけど。

○山下 そういう状況が起こるということを考えてやらなきゃいけないし、高知県は学校で放射能の影響のための教育してないでしょう。必ず来るのに対応してない。急いでこれ、しないと、いざ起こったときに、風上に……。大体、半分以上はこっちに吹いていますからね。子どもをどうするか。避難させるとかいつてウロウロしてたら、雨が降ったりしたときには大変なことになりますよ。だから教室の中に入れて、空気が中に入らないようにして、とめて、何日、何時間待てばいいのか。その待ってる間に食事、それからどうすればいいのかということ、今、子どもに真剣に教えておかないと事故が起きたら福島みたいにみんなウロウロして、慌てます。ヨード液を飲ませたのは1つの町だけ。あとは教育委員会が全部放置したものだから、甲状腺ガンが増えてるでしょう。高知も起こる可能性があるわけですからね。だからきちっと教育するべきではないかというふうに思います。

○質問者 ありがとうございます。

○司会 ありがとうございました。

もう時間が来てしまったので、最後に一言ずつ、3人からコメントをいただいて閉会の挨拶にいきたいと思います。では、山下さんから最後に一言。一言ずつ、最後のまとめというか。

○山下 私、今日、環境ということと、それから人権という問題と、科学とかいう問題との関わりを持ってたので、ほかの方の発表にも関心があったんですけど。

私の家は、窪川原発の設計士をやった木村さんがいわゆる太陽光パネルを、12枚設置して、四国電力に売らずに蓄電方式にして、使っています。だから四国電力とは縁を

切ってます。それで生活を今、ほぼしてらんです。原発を本当に反対しようと思えば自分の家の電気を節電するという意識とか、ちょっと面倒だけどもかえって面白いという。

私、冬は朝起きるとまっ先に炭を熾します。炭をちゃんと火鉢に入れて、それからアンカを入れて、足元に置くということで、まずエアコンはまったく使いません。それからコタツも使いません、ほとんど。節電について基本的に学校でも教えなきゃいけない。

節電をしようとするとき、一番抵抗するのは子どもですよ。特に高校生。電気漬けになってますから、これはもう。そういうことを教育しながら一方で、原発の問題を教えていくということもすごく大事です、これは。自然エネルギーをどういうふうに抜けていくかという取り組みをきちっとやれば、原発は要らなくなってくる。

窓を二重ガラスにすれば、断熱効果がものすごく高くなるし、ビルの中にそういうものを置けばすごい節電になるということを含めて。あるいは、お湯が問題ですからお湯を太陽光で沸かすというだけで原発はほとんど要らなくなるそうです。

そういう拡がる努力を市町村ごとに呼びかけて、学校が避難所になりますから、これから高知は。避難所をやっぱりどうするかって。逃げるだけじゃなく。避難所での生活が大切です。長期におれるかどうかによって、被害が出ますから。福島原発事故では移動してるうちに、病気で亡くなって人、関連死の人はほとんどそうですから。

だから避難所で炭や薪を置く。ドラム缶を置く。それからペットボトルにお湯を入れて暖をとる。そういう対策、中長期の対策を避難所につくるといこと。避難所は、学校が多いですから、避難生活の対策も一緒にやらないといけないんじゃないかと思ってます。

○猪瀬 何度か話をしたことがあって、高知でしたことがあるかどうかかわからないですけど、僕、明治学院大学というところで働いてるんですけど、窪川の調査に、のちにSEALDs(シールズ)になる連中と一緒に行ったんですね。そのときに、何か、すごい面白かった。僕は、アーカイブの手伝いやるから写真を撮れよと言ったんですけど、途中で釣りとかに行き始めて、真面目にやれよかと思ってたんですけど。でも、それが一番原発に反対することだなと思って。つまり窪川の原発ができちゃったら10キロぐらいのところまで釣りしてて、何が守りたかったかというのを資料で勉強することはすごい大事なんだけど。つまり、その中で窪川の川の中で遊べたり、森の中で一緒に歩いてみたりみたいな生活をするということが、やっぱり何を守るべきなのかとか、何を守っていたのかということにつながってきて。やっぱり自分が世界に対しての自分の言葉での認識を持つということが多分、デモクラシーの一つの出発点なのかなというふうに思い、今

日、そのへんのことを再確認させていただきました。

○田中 私の生まれは山口県で、育ったのは大阪です。1972年に高知大学に入学しました。高知大学に来たのは、大阪で高校時代を送っておりまして、こんな汚いところ嫌やと思っていました。それで、高知は地図の上ではかなり田舎だからきれいだろうと思って来ました。

入学してすぐでした。学生会館の前で浦戸湾を守る会の山崎会長と坂本事務局長の講演会が開催されました。講演を聞きまして、高知にも公害があるじゃないか、もうどこに逃げて一緒やと思った次第です。これが最初に私が、生コン事件というか、浦戸湾を守る会とつきあい始めた動機です。それから守る会に入り、学生時代は運動のお手伝いをずっとしておりました。

生コン事件の裁判が終わって2年ほどしまして、山崎会長と雑談をしておりました。今でもほんとに馬鹿なことを言ったと思いますが、私が「生コン裁判の判決では5万円出したら、公害企業を実力行使でつぶせるお墨付きがもらえたんや。」と言いました時に、山崎会長が「お前、えいか。よう聞けよ。今までは正義面して高知パルプを責めておれば良かった。しかし、これからは違うぞ。江ノ口川をきれいにするのであれば、市民一人一人がゴミや、不燃物などを捨てないようにしないといかん。今までは、正義面して自分の外の敵である汚染源の高知パルプを責めていたら良かった、それはある意味楽であった、今度は自分が汚染源になるのだ、自分の心と喧嘩する話やで。このほうがよっぽどしんどいぞ。」と言われました。このことがずっと頭の中に残っていましたので、窪川原発が起きたときに、その手伝いを窪川に行ってやっている中で、有機農産物を売りたいという話が出ました時に、私は有機農産物を売る八百屋になったわけです。その後県外向けの有機農産物の卸屋を作り、現在に至っています。八百屋になる前は、サラリーマンをやっていたのですが、サラリーマンで反原発運動に関わっていましたが、会社の上司から会社のためにならないからやめろとはっきりと言われました。そういうことを言われなくてよい生活をしたいと思ひもあり、八百屋になりました。自立しますと、誰からも圧力をかけられないし、文句も言われぬし、言わせぬ。今は浦戸湾を守る会の思想を実現していきたい。それが私の願いです。

○司会 ありがとうございます。

質疑

田中コメントの文献・資料

田尻宗昭 『四日市・死の海と闘う』 1972年4月20日 岩波新書

宮本憲一・安田常雄他 「高知生コン事件資料第1巻—第8巻」 2016年6月16日 『戦
後日本住民運動資料集成10』 すいれん舎

和田幸雄 『高知生コン事件の全貌』 1980年2月1日 浦戸湾を守る会